

読書が子どもに与える影響

- 【基調講演】 酒井 邦 嘉（東京大学教授）〈オンライン参加〉
「デジタル時代の子どもに対する読書の必要性」
- 【事例報告】 阿部 り か（花巻市立花巻図書館読み聞かせボランティア もじもじクラブ）
「図書館でつながる仲間の輪」
- 【事例報告】 藤村 友樹子（絵本専門士・絵本探検部えとことば主宰）
「絵本と子どもの間に立って」

分科会概要

〈午後の部〉

新型コロナウイルス感染症の拡大により、人と接したり会話したりする機会が大きく損なわれました。そのような状況にあって、多様な考え方や生き方に触れられる読書は非常に大きな役割を果たしたと言えます。

長かったコロナ禍にも一区切りつき、今また、子どもたちを取り巻く環境が大きく変わり始めています。この変化への対応の手がかりを得られるよう、サービスの基盤を支える「読書が子どもに与える影響」について学ぶ場としました。基調講演ではデジタル時代における読書の意義と脳への影響について、続く事例報告では子どもと本をつなぐ最前線での実感をご報告いただきました。

基調講演

デジタル時代の子どもに対する 読書の必要性

酒井 邦 嘉
（東京大学教授）

1. はじめに

読書の必要性はこれまで当然のことと受け止められてきましたが、デジタル時代を迎えた今、その必要性がさらに高まっています。しかしながら現在の状況には、読書習慣を身につける以前に、そもそも本を読む、あるいは本を手にするこす無くなる

のではないかという危機感を抱いています。

大学生協の調査によると、1か月の間に全く読書をしていない大学生が半数ほどおり、ここ数年それが増加傾向にあります。教科書や専門書を読むことを読書と考えるか否かで個人の判断が分かれた可能性もありますが、子どもの頃に読書習慣が培われなければ、大学に入ってからでも自発的に本を読むことはなideでしょう。

2011年に『脳を創る読書』という本を上梓しましたが、このテーマに関心を持ちはじめた頃、人々の関心はインターネットに向かい、街では書店がどんどん減っていってしまいました。今また、生成AIという新たな技術の登場により、読書を通じて思索をしたり著者と対話をしたりするといった習慣が失われようとしています。

2. 「脳を創る」ことの意味

読書という行為は、文字を言葉としてそのまま理解するという以上に、著者の意図や真意、言外の意味を汲んで読むところが大きく、言葉の意味を補う想像力を自然に高めてくれます。近年、国語の教科書から小説が消えようとしています。これは想像力を高めるという読書の特長が教育現場から消えようとしていることでもあるのです。

また、読書が起点となり、情景をイメージしたり、先の展開を考えたり、本の世界を追体験し思索に耽ることで、自分の言葉で考える力が自然と身につきます。学校の勉強とは異なる、自発的に物事を考える時間を取り戻すという意味でも、読書は非常に貴重なのです。

さらに、読書体験を通して脳は日々、変化・成長していきます。内容を思い出し、情景を思い描き、誰かに薦めてみることは、自分なりに本の内容を咀嚼し、その結果が蓄えられていることの現れです。読書体験がその人の内部世界を豊かにしていることを考えれば、子どもにとって読書は必須のものだと言えるでしょう。どんな本を読み、どんな影響を受け、そこに描かれた生き方を自分はどうか考えるか。人生は一度きりですから、本を介して想像の世界を旅し、他者の生き方や考え方を知ることができることもまた、特に成長期において読書が必要性とされる所以です。

3. インターネットの記事より紙の本を

紙と同じ内容を電子機器上で読めるとしても、両者は似て非なるものです。一度ざっと流し読む程度なら大差はありませんが、前のページをすぐに参照でき、一覧性に優れる紙の本の方が、特に学習で繰り返し読む場合には適しています。同じことは教科書や辞書についても言えるのですが、電子化すればかさ張らないという利点先立ち、学習に与える影響が検証されないうまま、一人一台のタブレットで学習が完結するかのように喧伝されていることには危機感を持つべきです。

また、タブレットで学習が完結してしまうと、ノートやメモを取ることが疎かになります。文字をたくさん入力すれば頭に入ったように感じるかもしれませんが、実際には思考する余裕が奪われ、情報の受け取り方が受動的になり、学んだ内容は頭の中を通り過ぎるだけになります。紙のノートに筆記する行為は要点を抽出する過程でもあり、それ自体が学習効果を高めるのです。

さらに、SNSやインターネットの利用が多くの時間を占める状況は、読書や会話が持つ自発性・能動性を失わせ、短時間のうちに短文で返すという短絡的な反応を助長します。調べ学習における情報検索も、考える前にまず検索しようという使われ方になると、「自分で考え、想像し、それを展開する」という学習過程の最も大切な部分を奪うこととなります。

4. 生成AIの問題点

インターネット情報と出版物の最大の違いは、記

名・審査・保存性の有無にあります。インターネット上の情報は執筆者不明のものが多く、責任の所在も明らかではありません。また、情報の削除が日常的に起こり、侵入者による改ざんも起こり得ます。さらに生成AIの登場により、今後はその情報を人間が書いたのかどうかすら分からなくなってきます。

大学教育の現場では生成AIを有効活用しようという考えもありますが、大学において必要なのは、問いに対して正解を得ることではなく、自分自身で考え答えを導き出そうとする力を身につけることです。レポート作成に生成AIを使ってしまったら、その内容を額面通りに評価することはできなくなりますし、そもそも大学で学ぶ意義自体が失われます。また、対話型AIから返ってくるのは対話を模した「対話風」のものでしかなく、基本的に相手を肯定する返しのみになっています。ソフトウェアの内部では相手の心情や意図が全く想定されていないのに、子どもが「褒められて嬉しい」と感じ、教師や保護者がそれを放置するなら、悪夢のような状況です。

チョムスキーは『統辞構造論』において、ある言語の文法とは、「全ての文法的列を生成し、非文法的列を一つも生成することがない装置」と定義しています。これにより、新たな発話を生み出し理解する一方で、ある文法的列をその言語に属さないものとして退けることもできます。こうしたことがどの言語でも成立するのは、脳に生得的な「普遍文法」が備わっているからであり、限られた数の音声・手話や文字を組合わせて、万華鏡のように無限のバリエーションを生み出す人間の創造の源泉もまた、そこにあります。子ども時代の読書経験は、こうした創造的な能力に繋がっていくものなのです。これに対しAIは非文法的列も含めた文を大量に合成するだけで、そこに創造性はありません。

5. 言語能力を鍛え、創造力を培う

人間の脳は入力される情報が少ないと、逆に想像力でそれを補おうとします。情報を補うことは即ち言語能力を鍛えることであり、さらに話す・書くという情報の出力を増やすことで創造力が培われます。こうした観点で見ると、読書感想文は入力した内容を咀嚼し、想像して補い、何が素晴らしいのかを伝えるために文章を書くという、非常に創造的な

ものだと分かります。

創造力は、言葉で表現する能力なら、話す内容をじっくり考えながら構成する「書く力」から、リアルタイムで自分の考えをまとめ発信する「話す力」へと発展していきます。反対に、物事を説明する能力は、相手の反応や理解のされ方をその場で実感できる「話す力」から、相手にどう理解されるかを想像しながら「書く力」へと発展していきます。語学学習はこの典型例で、自分が使える単語や表現に限られる中で、こう話せばこう伝わるのだという入力を増やすことで、自然と話す力が身についていくのです。

6. デジタル脳クライシス

インターネットによる健全な言論空間の破壊に加え、対話風AIへの依存が高まっている現在の状況は、これまでとは比較にならない危険性を孕んでいます。考える前に頼るという点はインターネットも同じですが、対話風AIはこの傾向に拍車をかけ、AIが作ったものを自分の創作であるかのように利用することで、思考力と創造力が低下します。また、インターネット検索は自分に都合の良い情報を得られればその時点で検索が終わり、対話風AIも自分を肯定するような返答しかしません。こうして自己肯定感が増幅されていくと、最後には他者の意見に耳を傾けなくなるでしょう。さらにAIの台頭は、その情報を誰が書いたか分からない疑心暗鬼を生じさせ、読み手と書き手の間にある信頼関係を損ないます。

SNSも多くの人が利用していますが、その危険性を十分に理解するべきです。SNSに見られる短文の羅列は、その背後にあるはずの相手の考え、人となり、文章を書くに至る経緯の一切を省いた刹那的な文脈を生みます。発信者不明の情報が乏しいテキストからは、会話のように音声の抑揚や表情に現れる行間を読み取ることはできず、読み手は常に文面を自分に都合良く解釈しますから、自ずとインターネット上では被害妄想や炎上が生じやすくなります。

また、生成AIについては、有識者と呼ばれる人であっても表面的な理解で論じ、誤った考え方を流布しています。例えば、「将棋AIをプロ棋士も使うのだから、同じように生成AIも使えば良い」という意見。将棋AIは確率予測に基づき最善手を指し

ますが、それは勝敗という明確な評価基準が関わっているものです。人間の言語や対話のように評価基準がないものを、将棋と同列に考えることはできません。そもそもAIを対局や試験で使えば、それはカンニングです。本番で使用させないものを日常の場面で使用させる理由はありません。

また、「電卓があっても足し算や引き算といった算数の論理を教えるように、AI翻訳の機械があっても変わりはない」という意見もあります。しかし、計算力は算数の論理とは直接関係せず、翻訳を成立させる文章力もまた、計算力とは無関係のものです。翻訳は原作者の意図を汲み取り新たな文を創造する行為であり、この文章を作る力は、自分の考えをまとめ、発信するという、全教科共通の基礎的能力でもあります。ここにAIを入れてしまったら、全ての教科で地盤沈下が起きるでしょう。楽をするために電卓や翻訳機械を使用するのであれば、それは「自ら考えることなど無駄で非効率だ」と生徒に教えているのと同じです。

7. 結びに

こうした悪循環を指摘する人は少ないのですが、天文学者のホーキングが2017年のウェブサミットに飛び入り参加し、次のような発言をしています。

“われわれの心がAIによって増幅される時、われわれが何を為しうるのか予測ができません。〔中略〕つまり、効果的なAIを作る上での成功は文明史で最大の出来事かもしれませんが、あるいは最悪かもしれません。AIで大いに助けられることになるか、AIに無視され妨げられるか、もしくは破壊されてしまうかを知り得ないのです。潜在的な危険にどう備え、そして回避するかを学ばない限り、AIは文明史の中で最悪の出来事になるでしょう。それは強力な自律型ロボット兵器や、少数者が多数を迫害する新たな手段のように、危険をもたらすのです” [酒井訳]

Stephen Hawking (2017) Web Summit in Lisbon

増幅を自己肯定感の増幅と捉えた場合、例えば、悩みを抱えた子どもにAIだけが寄り添い、「君は悪

くないよ」とささやき続けたら、周囲との孤立や敵対を助長することになるでしょう。ヨーロッパでは実際にそれで自殺した大人がおり、AIの規制に結びつく事件となりました。また、世界各地で起きている戦争でAIによる自律型のドローン兵器が使われ、攻撃対象を誤ったことによる誤爆などの最悪の事態が現に起きてしまっています。

特に研究者が技術自体に価値を見出した場合に問題になるのですが、人間が作れるものは、はたして何でも作って使えば良いのでしょうか。技術で自然をコントロールできるかのような錯覚を抱きがちですが、自然は本来、人間の力で変えられるものではありません。人間の脳には進化の余地がないほどに完璧な言語の生成能力が備わっていますが、それに比べて心は未熟なのです。

我々はこういった倫理や価値観を持った存在なのか、それを理解した上でないとAIについて健全な判断はできません。導入してから考えるのでは本末転倒です。そして、こうした人間の理解は、読書を通じて取り戻すしかありません。読書は決して古びたものではなく、紙の本は簡単に持ち運べ、しかも自分の脳をアップデートできる貴重なものです。だからこそ、このAI時代に読書の必要性を真剣に訴える必要があるのです。